

シンシア

あなたと女子医大を結ぶコミュニケーションマガジン

# Sincere

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY

No.12

2019.7



# 蔡阿信

(さい あしん 1899~1990年)

## 東京女子医専を卒業した 台湾初の女性医師

### ◆日本に留学して医師をめざす

台湾初の女性医師として現地で小説のモデルとなり、ドラマ化もされた蔡阿信。彼女は、東京女子医科大学の前身である東京女子医学専門学校(以下、東京女子医専)の卒業生としても知られる。

阿信は1899年、まだ日本の統治下だった台湾の台北で生まれた。幼少期より頭脳明晰だった彼女は、台湾で初めて女子中学校として開校された「淡水女学校」に入学。優秀な成績を取めたことから、教師に日本へ留学して医学を学ぼうと勧められる。ところが、母親をはじめ周囲の人たちは留学に大反対。当時、海外へ留学する若い女性はほとんどいなかっただけに、当然といえよう。だが阿信は、こうした反対を押し切って日本へ渡る決心をした。

来日した阿信はまず、立教高等女学校(現在の立教女学院)で2年間、日本語を学んだ。そして1916年、東京女子医専に入学。当時の東京女子医専の機関誌『女医界』には、1916年の入学者112人が記載されているが、その中に「台湾 蔡阿信」の名前が記されている。台湾からの入学者は阿信1人だったことはいうまでもない。

### ◆台湾のためという思いを心の支えに

4年後の1920年、阿信は東京女子医専を卒業。当時、東京女子医専は、国家試験を受けなくても卒業後すぐに医師になれる文部大臣の指定学校になったばかりであった。阿信は晴れて、文部大臣指定第1回卒業生の1人として医師になることができたのである。それは、台湾



初の女性医師の誕生でもあった。

医師となった阿信は翌年、台湾へ戻ることとなったが、その心境を「帰郷に際して」と題し『台湾青年』第2巻第1号(1921年1月発行)に寄稿。『台湾青年』は、1920年春に結成された「東京台湾青年会」が、台湾人の手による台湾の文化創造を目的として同年7月に創刊した台湾人のための雑誌である。その発刊に尽力した1人が、のちに阿信の夫となる彭華英だった。

阿信は「帰郷に際して」の中で、「淋しかった旅の長い生活も過去にならうとしてゐます。7年間の淋しい思ひも此の帰国の喜びに比較すれば何でもありません」と記し、国へ帰ったら「母の為に最初にベストを尽くさねばなりません」、そして「自己といふものを捨て、周囲の為に尽くさねばならないと存じております」と決意を新たにしている。

東京に留学し、長く淋しい生活を送っ

た阿信は、「母のため、台湾のため」という強い思いが心の支えとなっていたのである。

### ◆社会福祉基金を創設して母国に貢献

故郷へ錦を飾った阿信は、1924年に台北市の自宅に産婦人科医院を開業。この年に、台湾に帰郷した彭華英と結婚した(1933年に離婚)。2年後の1926年には台中市へ移転し、「清信医院」を開業した。

阿信は、清信医院での診療活動にとどまらず、「清信産婆学校」を開校し、助産婦の育成にも努めるなど教育面でも台湾の医療界に貢献した。

1937年、日中戦争が勃発したことにより、阿信は台湾での医療活動を断念。医院と学校をたたみ、翌年アメリカへ渡ってハーバード大学医学校で研究に没頭した。1941年、日中戦争は太平洋戦争へと発展していった。カナダを訪れていた阿信はその影響で台湾へ戻ることができず、バンクーバーの病院で医師として働き、一時は日系人収容所の医師も務めたという。1949年にはカナダ国籍のギブソン牧師と再婚し、バンクーバーでの定住を決意した。

1982年、83歳になった阿信は母国台湾を訪れ、身寄りのない高齢者や寡婦のために私財をなげうって「至誠社会福祉基金」を立ち上げた。台湾で医師として活躍したのはわずか十数年だった阿信が、高齢にもかかわらず社会福祉のための基金を創設したことは、それだけ母国に対する思いが強かったことを物語っているといえよう。

## C O N T E N T S

### 04 新理事長・学長メッセージ

東京女子医科大学理事長 **岩本 絹子** 東京女子医科大学学長 **丸 義朗**

### 05 TOPIC

スマート治療室「Hyper SCOT」が臨床研究を開始



鼓室形成術を行う須納瀬弘教授。

### 06 至誠人

**矢口 有乃** (東京女子医科大学病院救命救急センター長・副院長・救急医学教授・講座主任)  
“グローバルな医者人生”を歩む後進を育てていきたい

### 08 医療最前線 ●東医療センター耳鼻咽喉科

年間約500件の耳科手術を誇る  
国内屈指の施設



城山展望台から桜島を望む。

### 12 女子医出身者が活躍する街

**鹿児島市**  
桜島を望む東洋のナポリ

■植村病院：鹿児島市北部地域の医療を担う中核病院

■鹿児島の見どころ：仙巖園／尚古集成館／旧鹿児島紡績所技師館（異人館）／西郷隆盛銅像

■グルメスポット：末よし／天文館むじゃき／吾愛人（わかな）

### 16 こんなところが女子医大

**地域医療実習**  
診療参加型臨床実習の第一歩



支援員とともに研究を進める。



地域医療実習で地元住民と交流。

### 20 がんばれ！女性医療人

画期的な「研究支援員制度」で  
女性研究者を応援

### 23 吉岡彌生物語 その12

戦災で灰燼に帰した学校を再建

【表紙】

大切な瞬間

イラストレーター  
中井 絵津子



その場所は日射しが強いから  
こっちに來たら？

あのね、ここからの  
今の時間でしか見られない海の輝き、  
風の音、鳥の声、  
樹々の香りが大好きなの。

真夏の焼ける日射しさえ  
君の存在はフワッと溶かすような清涼感。

この瞬間、この景色、  
この風は、二度と会えない。  
だから大切にしたいって思う君が  
とても好きだよ。

## 自立した女性医療人と指導的立場となる人材の育成をめざします

東京女子医科大学理事長 岩本 絹子

東京女子医科大学は、1900(明治33)年に創立された東京女醫學校を母体として設立されました。創立者である吉岡彌生先生は、1952(昭和27)年の新制大学設立に際し、東京女醫學校創立の主旨をもって建学の精神としています。新制大学設立時の学則には、「医学の蘊奥(うんおう)を究め兼ねて人格を陶冶し社会に貢献する女性医人を育成する。」と記されており、この建学の精神が認められ、戦後間もないころ11校あった女医学校の中で唯一女子医大として存続できたわけです。その主旨は、高い知識・技能と病者を癒す心を持ち、優れた人格を備えた、精神的・経済的に自立し社会に貢献する女性医師を輩出することです。この使命を達成するための教育・研究・診療の基盤となる理念は「至誠と愛」であり、創立者が大切にしていた言葉です。建学の精神とその意義を真摯に受け止め、「至誠と愛」に基づいて創立者の志を継承していきます。

本学は、女性だけに医学教育を行う唯一の機関として現在、単に女性医療人を育成するだけでなく、指導的立場となる人材を数多く輩出していくことが望まれています。女性活躍推進法が成立し、女性医師の割合がOECD加盟37か国中最下位の我が国において、本学の存在価値と意義があらためて高く評価され、その果たす役割はますます大きくなっています。残念なことに本学の財務基盤は弱く、これを立て直すことが、良い教育・研究・診療を支えるのに不可欠です。その上で、高度な先進医療を提供する医療機関としての使命を果たすべく、今後も“患者ファースト”の医療の提供を通じて社会に貢献していく所存です。



### 【プロフィール】

1973年東京女子医科大学卒業後、同大学産婦人科教室入局。77年東京女子医科大学大学院博士課程修了(医学博士)。79年葛西中央病院産婦人科部長、81年葛西産婦人科を開設し院長に就任。2001年東京女子医科大学評議員、08年同大学理事、14年から同大学副理事長。現在、東京産婦人科医会監事・評議員、江戸川区医師会監事、東京女子医科大学産婦人科同門会会長、至誠会代表理事(会長)などを務める。

## 医学教育の質の向上と人間形成を重視した教育を推進します

東京女子医科大学学長 丸 義朗



### 【プロフィール】

1983年東京大学医学部医学科卒業。同年国家公務員共済組合連合会虎の門病院内科レジデント、85年東京大学医学部附属病院第3内科血液グループ医員。89年医学博士(東京大学)取得。同年から93年まで米カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハーワードヒューズ医学研究所に留学。96年東京大学医学部研究所腫瘍抑制研究分野助教授、2002年東京女子医科大学医学部薬理学教室教授、18年から同大学副学長。

これまで東京女子医科大学では、高度な学術を身につける医療人を育成することを目標に、優れた先人によって、丁寧で質の高い教育プログラムによる教育がなされてきました。しかし、学術だけ優れていても、高い教養をもつ人格者でなければ、多様性とスピードを特徴とする現代医療に立ち向かうことはできません。本学の理念である「至誠と愛」のもと、医学教育の質をさらに向上させる取り組みを実践するとともに、一方で人間形成を重視する教育をプログラムに盛り込んでいきます。医療人と患者さんの間の人間関係を学ぶことはもとより、医療人を意識する前の段階で、上下関係など様々な人と接する時の垣根を積極的にまたいで人と人との心を開いた関係を作ること、そして最終的には信頼の構築を成果(アウトカム)としたいと考えています。

本学は日本で唯一の女子医科大学です。男性に比較して女性の方が医師として一定の指標では優れているという公衆衛生的学術結果も公表されており、日本における女性医師の割合が約20%と他国のそれを大きく下回る現状では、本学は量的貢献をすでにしています。女性医師は子育てなどのため36歳で就業率が一時的に低下します。さまざまなライフイベントに対して自らの手でキャリアデザインできるような学修、また女性の品位を身につける学修・風土の構築を推進したいと考えています。学びやすい学校、働きやすい職場、各人が自分の力を発揮できる風土。そうした大学環境をつくるために精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお祈りします。

# スマート治療室「Hyper SCOT」が臨床研究を開始

東京女子医科大学先端生命医科学研究所の村垣善浩教授が主導し、開発を進めてきた未来型手術室「スマート治療室 (SCOT=Smart Cyber Operating Theater)」プロジェクト。2016年にそのベーシックモデルが広島大学病院に、2018年にスタンダードモデルが信州大学医学部附属病院に設置されたのに続き、2019年2月にハイパーモデル (Hyper SCOT) が東京女子医科大学病院第1病棟2階に完成し、脳神経外科 (川俣貴一教授) に関する臨床研究が開始された。

Hyper SCOTは、各種医療情報を“時系列の治療記録”として収集・提供 (表示) し、手術室外の医師や技師などもそれを共有することにより、治療の効率性や安全性の向上が期待できる。また、これらの情報はビッグデータとしての解析が可能となり、ネットワーク化された医療機器の故障の未然検知や

操作ミスの防止、コスト管理 (稼働時間の短縮) など保守・管理面でも大きなメリットをもたらすという。

今後は、MRIへ患者を自動搬送するロボティック手術台や術野位置コントロール機能の実用化を進めるとともに、生存予後や機能予後の予測、術中の危険予測、手術効率向上などのための臨床情報解析システムを開発し、“AI Surgery”の実現をめざすことになる。

このHyper SCOTは内閣府の「第1回日本オープンイノベーション大賞厚生労働大臣賞」に輝いたこともあり、去る4月3日に行われた記者説明会・見学会には多くの人がつめかけ、関心の高さをのぞかせた。また、政府広報誌の『We are Tomodachi』にもHyper SCOTが掲載され、これまでのイメージを一新する近未来の手術室が世界に発信された。



記者説明会に出席した女子医大関係者 (前列左から村垣善浩教授、岩本絹子理事長、田邊一成病院長、川俣貴一教授)。



説明会会場となったTWins (先端生命医科学センター) 2階のロビーには大勢の記者がつめかけ、活発な質疑応答が行われた。

# “グローバルな医者人生”を歩む 後進を育てていきたい

東京女子医科大学病院の救命救急センターを率いる矢口有乃教授。もともと海外志向が強く、学生時代にイギリスへ留学し、ベルギーとアメリカの病院に勤務するなど、文字どおり“グローバルな医者人生”を送ってきた。そうした経験をもとに、後進にもグローバルな生き方をしてほしいと激励する。

## 矢口 有乃

(東京女子医科大学病院救命救急センター長・副院長・救急医学教授・講座主任)

### ■ 人生で最も充実していた4週間

私は中学生の頃から、人の生死に関わる仕事をしたいと思っていました。高校時代(神奈川県立厚木高校)は弁論部に所属して女性の社会進出をテーマとし、東京女子医科大学(以下、女子医大)の創業者・吉岡彌生先生の生き方に強くひかれました。女子医大に進学したのはそうした理由からです。

大学時代の一番の思い出は、4年生のときに女子医大祭の実行委員長を務めたことです。女子医大祭は毎年10月に行われますが、その年の秋に昭和天皇のご容体が悪化したことから、お祭りなどは自粛しようというムードが広がりました。このため、自分たち学生自身で「女子医大祭」を「女子医大の集い」に変更し、すでに用意していたプログラムやパンフレットの「祭」の文字部分に「集い」のシールを貼って対応しました。昭和天皇は翌年の1月7日にご崩御されましたので感慨深いものがあります。

もう一つの大きな思い出は、5年生から6年生になるときの春休みに海外留学を経験したことです。当時(1990年)、女子医大にはまだ海外留学プログラムがありませんでした。海外志向

が強かった私は、医学教育振興財団が英国大学医学部短期留学生を募集しているのを知り、すぐさま応募。他大学の学生7人とともに渡英しました。

イギリスの医学生は臨床実習で、朝のカンファレンスのための患者情報を収集し、採血も行う。ですから、患者さんにとって学生は身近な存在であり、とてもフレンドリーな関係であるのが驚きでした。また、学生が医師や教授と対等に意見を交わしているのも印象的でした。学ぶことがたくさんあり、これまでの人生の中で最も充実した4週間でしたね。

帰国後、当時の文部・厚生両省共催の報告会があり、私が代表してイギリス留学についての報告をしました。そうしたら東邦大学からセミナーでの報告の依頼があり、他大学の講師以上の先生方を前に話をする機会を得たことがよき思い出となっています。

### ■ 意見を持たなければ相手にされない

卒業後は救命救急医をめざし、女子医大病院の救命救急センターに入局。入局者第一号でした。救命救急センターを選んだのは、生死に直結する診療科であり、どんな患者さんにも対応で



きる医師になろうと思ったからです。

夜遅くまで病院に残り、翌日の朝6時には出勤し、2日に1回は当直という毎日。ハードでしたが、それが当たり前だと思っていました。が、1998年に附属第二病院(現・東医療センター)で救命救急センターが立ち上げられた際、スタッフが応援にかけつけて医師が減ったときは、さすがにしんどかったですね。連日、夜間に呼び出しが入り、緊急手術もこなさなければなりませんでした。

そういう経験を経て入局9年目の1999年、再び留学して約6年間、海



救命救急センターのスタッフ。女性が約半数を占める。

外の病院に勤務しました。最初の1年半はベルギーのブリュッセル自由大学病院、その後1年間、アメリカのピッツバーグ大学医療センターで過ごしたあと、再度ブリュッセル自由大学病院に赴き、3年半勤務しました。

海外での留学生活を通して最も学んだことは、自分の意見を持つことの大切さです。それを論理的に展開して人を納得させるということを学びました。多種多様な民族が混在し、いろいろな価値観や生き方があるのも実感しました。また、患者さんのご家族の意思ではなく、あくまでも患者さん本人の意思が尊重されるということも知りました。

さらに、チーム医療において医師や看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨

#### 矢口 有乃(やぐち ありの)

1991年東京女子医科大学卒業後、東京女子医科大学救命救急センター入局。98年博士学位取得。99年11月から2001年5月までブリュッセル自由大学病院(ベルギー)、01年6月から02年6月までピッツバーグ大学医療センター(アメリカ)、02年7月から05年9月までブリュッセル自由大学病院に勤務。05年東京女子医科大学救急医学講師、07年同准教授、16年から同教授。現在、日本救急医学会理事、日本救命医療学会理事、日本Shock学会監事、東京都メディカルコントロール協議会委員などを務める。

床工学技士など個々の職種のプロフェッショナルイズムが確立されており、お互いの関係がフラットで上下関係がなく、それぞれの立場でフラットに患者さんへの意見や考えを述べているのがとても勉強になりました。このことは、日本に帰ってきて私が最も心がけていることです。

#### ■ 国連総会でステートメントを発表

2014年と15年にそれぞれ1か月間、国連NGO国内女性委員会からの推薦を受け、国連総会第三委員会に日本政府代表顧問として出席しました。国連総会には6つの委員会があり、第三委員会は社会開発や人権問題を扱っています。私は社会開発、女性の地位向上、人権の保護と促進などについて日本政府のステートメントを発表しました。これもたいへん貴重な経験となったことはいうまでもありません。

女子医大の救命救急センターは、医師の約半数を女性が占めているように、女性が救命救急医療の最前線で活躍しているのが大きな特徴です。また、三

次救急医療施設として重症・重篤な患者さんを受け入れるとともに、一次・二次救急の患者さんへの対応も担っています。

女子医大病院の各診療科には、専門医が揃っています。このため、複数の診療科で対応しなければならない患者さんや、より高度で専門的な治療が求められる重症患者さんにも対応することができ、他の救命救急センターからそうした患者さんを受け入れるケースも少なくありません。さまざまな専門医と連携しながら集中治療を行えるのも、当救命救急センターならではの特徴といえます。

医療は消防や警察と同じように、24時間365日体制で提供できなければ社会が成り立ちません。そういう仕事であるというプロフェッショナルイズムを忘れてはなりません。私は聖職だと思って医師になりましたが、同じ志を持った医師を育てていくのがこれからの抱負です。そして、医局員にはいろいろな経験を積んで“グローバルな医者人生”を歩んでほしいと願っています。



# 年間約500件の耳科手術を誇る 国内屈指の施設

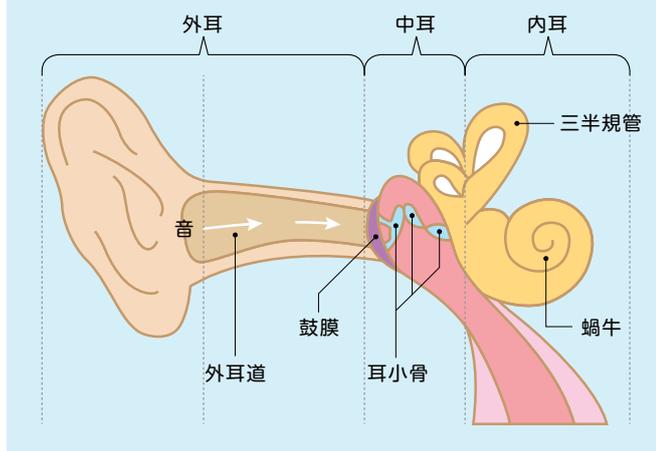
## 東医療センター耳鼻咽喉科

東京女子医科大学東医療センターの耳鼻咽喉科を率いる須納瀬弘教授は、  
中耳手術のスペシャリストとして知られる。

手術日には1日何件もの手術をこなす同教授に密着取材した。

診察室で鼓膜に空いた穴をふさぐ手術（鼓膜形成術）を行う須納瀬弘教授。  
患者さんが椅子に座ったままの局所麻酔による“日帰り手術”である。

## 耳の構造



中耳手術のスーパードクターとして知られる須納瀬教授。

### ◆中耳疾患に特化して名声を得る

東医療センターの耳鼻咽喉科が行っている耳科手術は、年間約500件にのぼる。この数字は国内の医療施設の中で最大級を誇るものだ。500件のうち7割を占めるのが鼓室形成術と呼ばれる手術であり、残りの3割を、鼓膜に空いた穴をふさぐ鼓膜形成術などが占めている。

鼓室形成術は、鼓膜に穴が空きその奥にある耳小骨という音を伝える骨が異常をきたして難聴になる慢性中耳炎や、鼓膜の一部が奥に入り込んで耳小骨など周囲の骨を破壊していく真珠腫性中耳炎に対して行われる。真珠腫性中耳炎は、耳の中にできた虫歯のようなイメージで、骨の破壊が進むとめまいや聴力の喪失、顔面神経麻痺や味覚障害、さらに脳に感染が起こる場合もあるという。

鼓室形成術は、耳の後ろや外耳道を切開して術野を広げ、鼓膜や耳小骨を修復するという術式で、鼓膜は耳の後ろの皮下組織を用いて再生し、耳小骨は摘出した患者さんの骨の一部や軟骨、セラミックなどの人工物を用いて組み直される。

こうした耳科手術で東医療センターが評判を呼んでいる要因について、須納瀬教授は次のように説明する。「私がここに来た2010年当時、医局には3人の医師しかいませんでした。それで耳鼻咽喉の全般を診るのはどうかと。で、私は中耳を主体とした耳疾患の診療に特化したわけです。いわゆる“断捨離”がキーワードでした」。

このように中耳疾患に特化した結果、東医療センターの耳科手術件数は劇的に増えていった。「自分が患者の立場な

ら、やはりその道のプロを頼りますよね。そういう患者さんが数多く来院されるようになり、年間500件の手術件数につながっているわけです」。

後述するが、取材に訪れた5月29日の午前9時過ぎ、外来診察室で慢性中耳炎患者さんの手術準備をしていた須納瀬教授のもとに、千葉県松戸市の病院から電話が入った。「真珠腫性中耳炎の重い患者さんを受け入れてほしい」と。こうした要請が少なくないのも、須納瀬教授が名声を得ていることを物語っている。

### ◆診察室で椅子に座ったままの手術

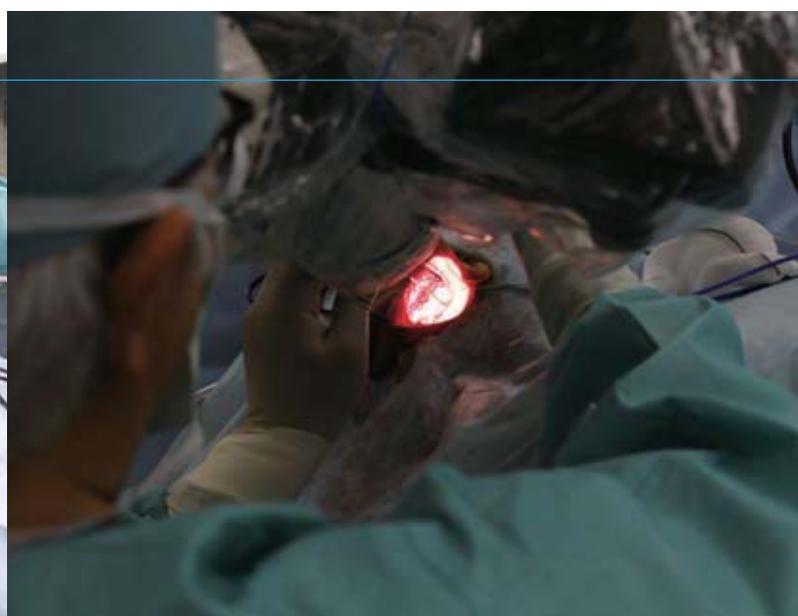
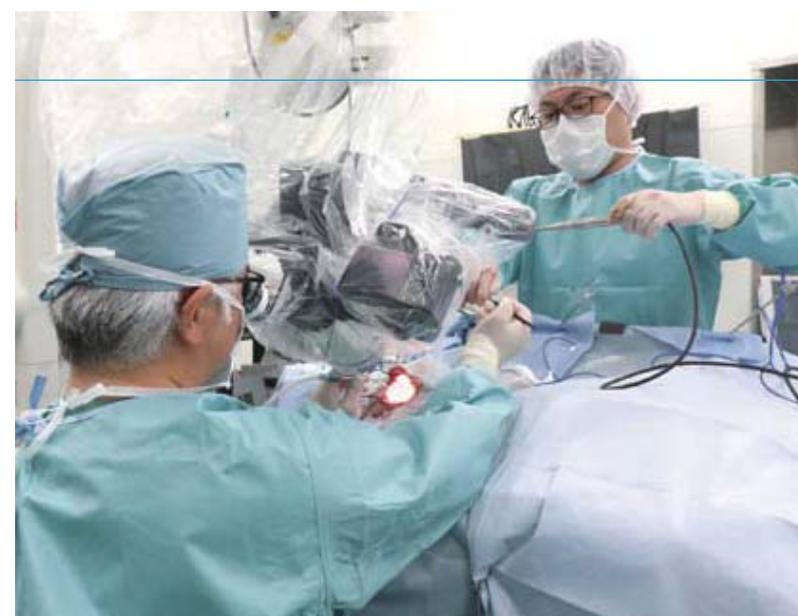
須納瀬氏は1988年に東北大学医学部を卒業し、同大学耳鼻咽喉科に入局。93年にアメリカ、99年および2001年にイタリア留学を経験した。女子医大に転じたのは04年で、06年に准教授に就任。そして10年4月に東医療センターへ赴任し、同年11月に教授となった。女子医大病院時代から、“中耳手術の名手”としてその名が知られてきた。

東医療センター耳鼻咽喉科の手術は毎週水曜日と木曜日に行われる。前記した5月29日は水曜日で、耳科手術は6件が組まれていた。手術前の朝8時、医局で須納瀬教授を囲みカンファレンスがスタート。出席者のうち4人は、手術手技を習得すべく他大学病院から研修に来ている医師たちである。

「僕らは耳科手術の職人集団で、医局は工房のようなものです。親方がいて、その技術を学びに来る若い人たち



他大学病院からの研修生を交えた朝のカンファレンスの模様。



真珠腫性中耳炎患者さんへの鼓室形成術を行う須納瀬教授。耳の後ろを切開して鼓膜と耳小骨を再生する。

がいる。そういう徒弟制度的な要素を大事にしながら、後進の指導・育成にも力を入れています」と須納瀬教授は強調する。

カンファレンス終了後、須納瀬教授は外来の診察室へ移動。40代女性の慢性中耳炎患者さんの手術を行うため、耳の中に局所麻酔を施した。この女性は鼓膜に小さな穴が空いており、手術はそれをふさぐための比較的簡単な鼓膜形成術である。患者さんは診察室の椅子に座ったままその場で手術を受け、入院の必要はないという。手術室での手術をイメージしていただけに、そうした手術スタイルは大きな驚きだった。

その理由について須納瀬教授は、「局所麻酔は患者さんの負担が少なく、座ったまま手術を受けるほうがめまいが起きにくいというメリットがあります」と指摘する。麻酔が効きはじめ、10時過ぎから開始された手術は10時40分に終了。この

間、患者さんはめまいや不調などを訴えることはなかった。

#### ◆驚異的な速さで修復する職人技

須納瀬教授は、「鼓室形成術もできるだけ局所麻酔で行い、1～2泊の短期入院を基本としています」という。そうした対応をしているのは、アメリカ留学中に次のような苦い経験をしたからに他ならない。「日本での手術の実態を聞かれたとき、『全身麻酔で行い、患者さんは約2週間入院します』と説明したところ、医師や看護師があきれたようにどよめきました。世界のスタンダードからかけ離れていたからです。そこで、短期入院をモットーとして掲げました」。

さて、診察室での手術を終えた須納瀬教授は休む間もなく手術室へ向かい、真珠腫性中耳炎患者さんの鼓室形成術を行うため6番手術室に入った。骨の破壊が進んだ難易度の高い手術のため、患者さんは全身麻酔が施され

ていた。

須納瀬教授は、固まった真珠腫や破壊された骨を直径2ミリのドリルで小気味よく削っていく。いよいよ再生のハイライト場面だ。極小・極薄にスライスした軟骨を組み合わせ、その上に皮下組織を貼る。そして、セラミック製の人工骨を患者さんに適した形状に加工し、味覚神経を乗せて固定した。まさに職人技である。手術が終了したのは午後1時過ぎ。須納瀬教授が執刀を開始してから約2時間後である。4時間を要するのが普通だというから驚異的な速さだ。

この手術の最中、3D画像モニターが手術室に持ち込まれた。専用のメガネを掛けてモニターを見ると、術野がより立体的に見えて奥行きも実感できる。医局長の小泉弘樹医師は、「見学者は一様にビックリされますね。術者と同じ視点で見ることができるため、若手の手術手技の習熟度アップにも大きく貢献し



専用のメガネを掛けて見ると奥行きのある立体的な画像が飛び込んでくる3D画像モニター。



外傷性耳小骨離断患者さんへの鼓室形成術を行う小泉弘樹医師(医局長)。



内視鏡で慢性副鼻腔炎患者さんの手術を行う中上桂吾医師。

ています」という。

#### ◆たかが中耳炎とあなどるなかれ

6番手術室を出た須納瀬教授は間髪を入れず、斜め向かいの8番手術室に入り、この日3件目の手術に臨んだ。鼓膜に穴が空き、耳小骨の一部が石灰化した鼓室硬化症患者さんへの鼓室形成術である。昼食も摂らずに手術を続ける須納瀬教授のバイタリティと集中力に感服した。

向かい側の7番手術室では、内視鏡による慢性副鼻腔炎患者さんへの手術が行われていた。術者は中上桂吾医師。内視鏡手術のスペシャリストとして将来を囑望されており、耳科手術の習熟にも熱心に取り組んでいる医師である。

「従来の慢性副鼻腔炎手術は顔などにメスを入れていましたが、内視鏡が発達したおかげで患者さんの負担が格段に軽くなり、1~2泊の短期入院を可能にしています。耳科手術で用いるドリルを応用し、手術のスピードを速めているのも患者さんの負担軽減につながっています」と、中上医師は内視鏡手術の特徴とメリットを披露する。ちなみに、この日は4件の鼻科手術が行われた。

6番手術室では次の耳科手術の準備が進められていた。患者さんは、タクシーとぶつかって耳小骨の連結がズレたため耳が聞こえなくなった外傷性耳小骨離断の女性である。局所麻酔による低侵襲の鼓室形成術で、前出の小泉医師の

執刀により手術が開始された。

このように、手術日には耳疾患患者さんを中心に次から次へと手術が行われているのである。東医療センターが国内屈指の耳科手術施設であることを垣間見た1日であった。

最後に、「人と人をつ結びつけるうえで聴覚は重要な役割を担っています。“聞こえ”が落ちてくると会話が成り立たなくなり、人間関係のトラブルや孤立を招いたりします。ですから、決して中耳炎をあなどってはけません。それから、綿棒による過剰な耳掃除は禁物です。アメリカでは綿棒の容器に『耳に入れてはいけません』と明記されています」と語った須納瀬教授の言葉が印象的だった。

## 口腔咽頭の性感染症診療にも対応

東医療センターの耳鼻咽喉科は、口腔咽頭の性感染症診療を行う施設としても知られている。それを担っているのが余田敬子准教授である。女子医大卒業後、附属第二病院（現在の東医療センター）の耳鼻咽喉科に入職した余田氏は、当時性感染症の臨床研究も行っていた口腔咽頭疾患専門の教授から指導を受け、その流れを引き継いだ。

「大学病院の耳鼻咽喉科で性感染症を扱っているところはほとんどありません。いわば東医療センターが“オンリーワン”の存在です」と余田准教授はいう。

近年、性行動の多様化によって口腔咽頭における性感染症が梅毒を中心に増加している。扁桃手術など口腔咽頭疾患の診療をメインとしている余田准教授は、そうした梅毒などによるノドの性感染症の臨床研究を進め、学会での発表はもとより、医師会や歯科医師会、大学でのセミナーなどを通じてその啓発に余念がない。「耳鼻咽喉科をはじめとする先生方にもっと性感染症について関心を持っていただけるよう、当院における実際の症例の臨床像を紹介することで啓発を促すよう努めています」（余田准教授）とのことだ。



口腔咽頭の性感染症診療を担う余田敬子准教授。



# 鹿児島市北部地域の医療を担う中核病院

## 社会医療法人愛仁会 植村病院

「母は明るい性格で、何事にも前向きに取り組む積極的な人でした」

植村病院の新井尚希理事長は開口一番、去る4月17日に逝去した長柄光子前理事長をこう評し、さらに言葉を続けて、「とにかく女子医大が大好きで、岩本絹子先生(東京女子医科大学理事長、同窓会組織・至誠会会長)の右腕となって母校と至誠会の発展に尽くしてきました」と語る。

故・長柄光子氏(麻酔医)は1974年に女子医大を卒業。早世した実姉も女子医大卒(1973年)で、岩本理事長と同級生だった。2013年6月から至誠会筆頭副会長、同年12月から女子医大理事を務めるとともに、夫の長柄英男氏(心臓血管外科医)の支えのもと、長年にわたって植村病院の理事長として病院経営に携わってきた。また、特別養護老人ホームやデイサービスセンター、知的障害者通所授産施設なども展開。これらの施設を運営する社会福祉法人松和会の理事長を務める英男氏との二人三脚により、鹿児島市北部地域における医療福祉に大きく貢献してきた。

新井尚希理事長はその長女であり、2003年に女子医大を卒業し、2010年に同大学院を修了。呼吸器内科医として女子医大病院に勤務したあと植村病院



入院患者さんに笑顔で接する新井尚希理事長。



最新のCTをはじめ充実した医療機器を備える。



新井尚希理事長(左)と父親の長柄英男氏(社会福祉法人松和会理事長)。左上は故・長柄光子前理事長。



開業以来70年以上の歴史を有する植村病院。

に転じ、長柄光子氏の後を継ぐこととなった。ちなみに、三女(新井理事長の妹)の長柄希実子氏も女子医大を卒業して循環器内科に入局し、現在大学院で臨床研究に励んでいる。

植村病院にはもう一人、女子医出身者が在籍している。1986年に卒業した皮膚科の永山三千代医師(現在アメリカに留学中)がその人で、長柄光子氏とは従姉妹の間柄である。永山氏の姉も女子医大を卒業して皮膚科の医局長を務めた経歴を持ち、姪にあたる妹の娘が現在女子医大に在学中だという。

「母は生前、私の娘に『女子医大へ行きなさいね』といい、娘も『お医者さんになる』と答えていました。私も女子医大以外の大学には行ってほしくないと思っています」と新井理事長。植村病院は、女子医出身の親子3代が理事長を継ぐことになりそうだ。

植村病院は、長柄光子氏の父であり新井理事長の祖父にあたる植村茂氏が1946年に開設し、“病気には盆も正月もない”と24時間365日、患者さんを受け入れることを理念としてきた。新井理事長は、「この理念を維持しながら患者さん一人ひとりを丁寧に診療し、鹿児島市北部の地域医療を担う中核病院であり続けたいですね」と抱負を語ってくれた。

- 住 所：鹿児島市伊敷二丁目1番2号
- 電 話：099-220-1730
- 診療科目：内科・外科・循環器科・消化器科・呼吸器科・麻酔科・心臓血管外科・救急科
- 病 床 数：97床
- 地 図：●



植村病院の関連施設「泰山荘デイサービスセンター」(左)と知的障害者通所授産施設「セルブいしき」(右)。

# 桜島を望む 東洋のナポリ



人気の観光スポット仙巖園から桜島を望む。



屋根を錫で葺いた仙巖園の錫門。藩主とその世子だけが通ることを許された。



仙巖園の御殿。藩主の部屋は節なしの屋久杉で造られている。

## ナポリ通りを舞台に開催される一大イベント

錦江湾と桜島を望む風光明媚な鹿児島市は、ナポリ湾とベスビオ火山を望むイタリアのナポリ市と風景が似ているため、古くから“東洋のナポリ”と呼ばれ、両市は半世紀以上前の1960年に姉妹都市盟約を結んでいる。鹿児島中央駅前から東へ延びる大通りは「ナポリ通り」(14ページの地図⑭)



高さ8mの堂々たる西郷隆盛銅像。

と呼ばれ、毎年5月のゴールデンウィークにここをメイン会場として「かごしまの風と光とナポリ祭」が開催されている。

歩行者天国となる通りには、本場ナポリのピザをはじめとするさまざまなフードコートが立ち並び、特設ステージではゲストや市民によるライブ・コンサートが行われる。今年も去る5月3日と4日に開催され、2日間で10万人を超える来場者を数えたように大盛況だった。ナポリ市との姉妹都市盟約60周年を迎える来年は、さらに盛大なイベントになると期待されている。

## 「西郷どん」効果で脚光を浴び観光客で賑わう

NHKの大河ドラマ「西郷どん」の効果により脚光を浴びた鹿児島市は、昨年来観光客で賑わっている。中でも人気の



仙巖園のブランドショップに展示されている薩摩切子。



仙巖園内にある世界文化遺産の反射炉跡。

が、薩摩藩主・島津家の別邸だった仙巖園(地図②)である。眼前の錦江湾を池に、対岸にそびえる桜島を築山に見立てた壮大な庭園は、見どころが豊富で一見の価値あり。「西郷どん」の中で西郷隆盛役の鈴木亮平さんと島津斉彬役の渡辺謙さんが相撲を取り、篤姫役の北川景子さんがそれを見つめるシーンも、園内の一角に土俵を設けて撮影された。

「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録されているが、仙巖園内にある反射炉跡と隣接する尚古集成館(地図③)、すぐ近くに立地する旧鹿児島紡績所技師館、通称・異人館(地図④)はその代表的な構成資産である。反射炉跡にはかつて約20mの煙突がそびえ、島津斉彬が近代化・工業化を推進した“集成館事業”のシンボリック存在だった。尚古集成館は1865年に竣工した日本最古の石造洋式機



日本最古の石造洋式機械工場として知られる尚古集成館(世界文化遺産)。



瀟洒な造りの旧鹿児島紡績所技師館、通称・異人館(世界文化遺産)。

械工場で、現在は島津家の歴史や文化を紹介する博物館となっている。異人館は紡績所(1867年完成)の操業を指導した7人のイギリス人技師の宿舎として造られた洋館である。

鹿児島市街中心部にも観光スポットが多く、城山展望台(地図⑤)は桜島のビューポイントとして有名。城山の麓には島津斉彬を祀った照國神社(地図⑥)が位置し、そのすぐ近くには城山を背景に西郷隆盛銅像(地図⑦)が威風堂々と佇んでいる。鹿児島港からは、約15分で桜島港と結ぶ「桜島フェリー」が24時間体制で1日130便も運航。市民の通勤・通学はもとより観光客の“足”としても利用され、年間乗船客数約470万人、乗船車両数約130万台と国内屈指の輸送量を誇っている。ちなみに、乗船料は片道160円(2019年10月1日から200円)である。



桜島港に到着した桜島フェリーの「桜島丸」。



◆グルメスポット◆

## 末よし 鮮度抜群のうなぎを味わえる老舗



ご飯がセバレートされて出されるうなぎ重「松」(2,760円)。

鹿児島はうなぎ生産日本一の養鰻県である。中でも大隅半島が最も盛んな養鰻場として知られる。天文館にうなぎ専門店を構えて80年超の老舗・末よしは、大隅養鰻漁業協同組合から直にうなぎを仕入れており、鮮度は抜群。うなぎ重やうなぎ丼が安定して提供される秘密もそこにある。秘伝のたれにつけて備長炭で



人気のうなぎ丼「竹」(2,080円)。



オーナーが制作したうなぎの絵本。



じっくり焼き上げた蒲焼はバリッと香ばしく、活きのよさも伝わってくる。オーナーの奥山博哉会長は、絶滅危機にある日本うなぎと万葉集にも出てくるうなぎの食文化への関心を高めてもらおうと、『ふしぎなきもの うなぎ物語』という絵本も制作。その熱意に頭が下がる。

- 住所：鹿児島市東千石町14-10
- 電話：099-222-1525
- 営業時間：10:00~20:00
- 定休日：第1・第3火曜日
- 地図：⑥

## 天文館むじゃき 行列ができる氷白熊の超人気店



十数種類の果物がトッピングされた看板メニューの「白熊」。

鹿児島のソウルフードといえば氷白熊。その元祖の店が天文館むじゃきである。氷白熊が誕生して今年で70年。当初はシンプルなかき氷だったが、練乳をかけて改良を重ね、独特のさっぱりした甘みを醸し出すとともに、彩りに季節の果物やレーズン、チェリー、アンゼリカなどをトッピングして現在の形となった。連日、オープン前に客が列をつくり、「夏場



アーケードでひときわ目を引く外観。



桜島に見立てて考案された「南海の黒熊」も人気。

のピーク時には1日4,000食もはける」(前田華代取締役)というから驚きだ。「地元以外の来店客が7割を占め、外国人観光客もひっきりなし」とのこと。氷白熊の人気は国内にとどまらず、海外にまで広がっているのである。

- 住所：鹿児島市千日町5-8
- 電話：099-222-6904
- 営業時間：11:00~22:00  
(日曜・祝祭日、7・8月は10:00~)
- 定休日：不定休
- 地図：①

## わかな 吾愛人 鹿児島県の郷土料理を堪能できる店



旨味たっぷりの極上の味わいを堪能できる六白黒豚しゃぶ鍋。

「吾愛人」と書いて「わかな」と読む。愛しい人・大切な人に最高のもてなしをしたいとの意味が込められている。鼻・しっぽ・足の先4本の計6か所が白い鹿児島産「六白黒豚」のしゃぶ鍋と薩摩の郷土料理を楽しめる店として、天文館周辺



薩摩郷土料理(下:きびごの刺身、右上:地鶏の刺身、左上:さつま揚げ)。

に2店舗、鹿児島中央駅近くに2店舗を展開。牧場から直送される六白黒豚の味わいは格別である。

- 【本店】
- 住所：鹿児島市東千石町9-14
- 電話：099-222-5559
- 営業時間：17:00~23:30 (日曜は23:00まで)
- 定休日：無休
- 地図：⑥
- 【文化通り店】
- 住所：鹿児島市山之口町12-21
- 電話：099-225-7070
- 営業時間：17:00~24:00 (日曜は23:00まで)
- 定休日：無休
- 地図：①
- 【中央駅東口店】
- 住所：鹿児島市中央町4-42
- 電話：099-202-0031
- 営業時間：昼11:30~14:30 (月曜は休業)  
夜17:00~23:30 (日曜は23:00まで)
- 定休日：不定休
- 地図：①
- 【中央駅西口店】
- 住所：鹿児島市西田2-21-21
- 電話：099-286-1501
- 営業時間：17:00~24:00 (日曜は23:00まで)
- 定休日：無休
- 地図：②



大月市立中央病院のへき地巡回診療でのひとコマ。

# 地域医療実習

## 診療参加型臨床実習の第一歩

医学部の学生は5学年になると臨床実習に入る。東京女子医科大学ではそのスタート時に、50か所以上の医療施設の協力を得て、学生たちが地域医療実習に臨んでいるのが大きな特徴である。



下田メディカルセンターでの症例報告シーン。



ゆみのハートクリニックの外来で患者さんの血圧を測定。

## ■ 地域医療の現状とニーズを把握

臨床実習は従来、大学病院や高度先進医療施設で行われてきた。しかし、少子高齢化社会の到来とともに医療に対するニーズも変化し、大学病院や高度先進医療施設で専門医療を教育するだけでは十分とはいえない状況となってきた。

そこで女子医大では、診療参加型臨床実習の最初のカリキュラムとして、2015年から地域医療実習を導入。2週間にわたる地域医療の体験を通して、医療の現状とニーズを理解する学修機会を設けている。臨床実習の最初に地域医療実習を組み入れているケースは珍しく、女子医大ならではのカリキュラムといえる。

地域医療実習は専門的な知識や技能を学ぶのが狙いではなく、地域における医療の現状を把握し、どのような医療が求められているかを学ぶことに主眼が置かれている。具体的には、①地域のプライマリ・ケア（総合的な医療）、②病診連携・病病連携、③地域の救急医療、在宅医療、④多職種連携のチーム医

療、⑤地域における疾病予防・健康維持増進の活動などを体験するのを目的としている。

去る4月8日から19日まで行われた今年の地域医療実習の実習先は、東京をはじめ千葉、埼玉、神奈川、静岡など1都1府17県におよぶ58か所の医療施設。地域の中核病院から専門病院、個人クリニックまでバラエティに富んでいる。これらのうち山梨の「大月市立中央病院」、静岡の「下田メディカルセンター」、東京の「ゆみのハートクリニック」での実習の様子をレポートしよう。

## ■ へき地巡回診療と住民との交流会

4月16日午後1時半過ぎ、実習中の学生2人ずつが分乗した2台の車が大月市立中央病院を出発し、へき地巡回診療に向かった。曲がりくねった山間部の道を走ること約30分。大月市北部の七保町公民館奈良子分館に着いた。ほどなく、山梨市立牧丘病院の古屋聡院長が到着し合流。三々五々集まってきた地域の人たちの診療が開始された。古屋氏は在宅医療を推進し、東日本大震災後に被災地での支援活動に取り組んでき

た人物である。

学生たちは、昼敷きの公民館での古屋氏による診療に興味津々の面持ちで見学し、氏の指示とアドバイスを受けながら患者さんに聴診器を当てていた。奈良子地区での診療活動のあと、同じ七保町の浅川という地区に移動し、お年寄りが住む2軒の家庭を訪問した。

大月市立中央病院の実習プログラムには、こうしたへき地巡回診療が組み込まれているのが大きな特徴だ。K.U.さんは、「山に囲まれた秩父出身の私にとって、へき地巡回は貴重な体験となりました。山奥まで出向いて診療活動をさせている古屋先生を尊敬しています」と語る。

この日の前夜、学生たちは大月市梁川町塩瀬地区の住民たちとの交流会に臨んだ。これも同病院ならではのプログラムである。手づくり料理のもてなしに学生たちは大感激。A.T.さんは「病院を離れて地域の方々と楽しく有意義なひとときを過ごすことができました」と感謝する。

M.I.さんは実習について、「お年寄りの患者さんが救急搬送されてくる場面が多かったような気がします」と振り返り、

## 大月市立中央病院



へき地巡回診療が行われた公民館にて医師・看護師とともに。



訪問先の家庭での診察シーン。



地域住民との交流会の様様。



野村馨臨床研修センター長を囲んで。



朝の勉強会で症例報告を行う。



内科外来で患者さんを触診。



湊志仁医師の講話(肝炎について)に耳を傾ける。



畑田淳一院長とともに。

Y.A.さんは「先生の顔を見ると落ち着くといった患者さんが多く、アットホームなところが地方の病院のいいところだと感じました」と印象を語った。

実習生受け入れ担当の野村馨臨床研修センター長は、「学生さんたちには“患者さんが先生”だということを教えています。患者さんと話し合いながらどう目標を設定するかを一緒に考える。そのためには患者さんとのコミュニケーションが基本となります。地域住民との交流会を設けているのは、それを養うという狙いもあります。実習を通して、学生さんたちが患者さんとうまく接したらよいか、何を話したらよいかという壁を打ち破ってくれていると感じています」と、学生たちを評価してくれた。

### ■ 高齢社会における医療全般を学ぶ

4月17日、下田メディカルセンターで実習を行っていた2人の学生が朝の医局勉強会に参加し、畑田淳一院長をはじめとする10人の先生方を前に研究発表をするシーンがあった。研究テーマは小児発達障害のADHD(注意欠陥多動性障害)。小児科外来での実習時に出

会った小学2年生の児童の症例について、指導医から研究のアドバイスを受け、2人で協力してスライドを作成し、プロジェクターを駆使しながら症例報告を行ったのである。

「短い期間によくここまでまとめることができた」といった声が上がったように、評価は上々。本人たちもホットと胸をなで下ろし、満足げな表情を浮かべた。

この日の午後には、畑田院長と内科の湊志仁医師による講話が組まれていた。それぞれの講話を2人だけで拝聴するという贅沢なプログラムである。脳神経外科医の畑田院長の講話は認知症について、湊医師は肝炎についてであった。「認知症は、どのようにケアしていくかという視点が重視され、有効に作用する薬がクローズアップされていません。医師が関与していける領域があることを知ってほしい」という畑田院長の話は、2人の学生にとって印象的だったに違いない。

実習にはこのほか、救急外来や整形外科・心臓カテーテルの手術、関連クリニックでの訪問診療、介護老人保健施設での入浴介助などのプログラムも用意

され、「高齢社会における一般的な医療のほとんどの要素を経験してもらえる」(畑田院長)内容となっているのが特徴だ。

学生からは、「糖尿病や高血圧など生活習慣病の患者さんに医師が料理の方法まで指導していて、患者さんに寄り添っているということを実感しました」(A.K.さん)、「医師が患者さんと世間話をしながら丁寧に診察し、患者さんが安心した様子で帰って行かれる姿が感動的でした」(Y.I.さん)といった声が聞かれた。

畑田院長は学生たちを、「積極的に質問してくるなど熱心に実習に取り組んでいる」と評し、「学生さんが来ると職員が活気づき、モチベーションアップにつながります」と受け入れ効果を語ってくれた。

### ■ 訪問診療の実態と必要性を知る

都内の高田馬場駅近くに拠点を置くゆみのハートクリニックは、外来診療と訪問診療に特化した医療施設である。弓野大理事長が、「これからの超高齢社会における医療には、その人らしい人生をいかにサポートできるかが問われており、人々が住み慣れた場所で安心して暮ら

ゆみのハートクリニック



朝の全体ミーティングに参加。



訪問診療で患者さんに接する。



外来診療での診察シーン。



弓野大理事長とともに。

せるような医療を提供していきたい」との願いから立ち上げたクリニックだ。現在は東京渋谷と大阪にも分院を持ち、医師30名体制で内科全般にわたり多くの患者さんを診ている。

同クリニックでは毎週金曜日朝7時45分から、医師をはじめ看護師、ソーシャルワーカー、理学療法士など多くのスタッフが一堂に会し、全体ミーティングを行う。去る4月12日のミーティングには実習中の2人の学生の姿があった。その1人、A.K.さんは「これほど多くのスタッフが集まって患者さんの情報を共有し、しかもそれぞれの職種がフラットな関係である

のが驚きでした」という。

ミーティングのあと、2人は訪問診療に向かう医師に同行。Y.I.さんは副院長の鮫島光博医師とともに北新宿のマンションに住む患者さん宅を訪れ、リハビリテーションの実際を学んだ。埼玉の医療過疎地で育ち、整形外科に興味があるという彼女は、「実家周辺の地域にはご高齢者が多く、実習で得た知識を将来に応用できればと考えています」と抱負を語る。

Y.I.さんはこのあとも医師に同行し、夕方まで訪問診療に携わった。一方、A.K.さんは午前中に訪問診療を終え、

午後は田中宏和院長の下で外来診療の実習を行った。このように、多くの医師の下で実習が行えるようプログラムが組まれているのが特徴だ。2人は、「先生方それぞれに患者さんへの対応が違うのも勉強になりますね」と口を揃える。

弓野理事長は、「学生さんを受け入れるのはスタッフのモチベーションを保つうえでプラスになる」と強調する。そして何よりも、「地域の人たちから信頼される医師になるには何が必要かというヒントが見えてきました」(A.K.さん)という言葉が、地域医療実習の意義を象徴しているといえそうだ。

多くの医療施設のご協力によって成り立っている地域医療実習

東京女子医科大学予防医学科教授・セグメント9教育委員長 村崎 かがり

5学年になって最初から専門的な大学病院で臨床実習に入ると、地域の医療現場において1対1で患者さんと向き合っている医師の姿が見えてきません。そこでまず、そういう場面に接して医師としての自分の将来像をイメージしてもらおうとの狙いから地域医療実習を導入しました。

学生を受け入れてくださる医療施設は、どこも例外なく「良い医師を育てよう」という気持ちを持って熱心に指導して下さいます。学生たちもその期待に応えてまじめに実習に取り組み、中には医局に泊まり込んで頑張っている学生もいるほどです。学生たちはStudent Doctorの資格を得て実習に臨み、患者さんに直接触れて診察のお手伝いなどを

します。このため、患者さんも学生たちに心を開いて接して下さっているようです。

地域医療実習は多くの方々の協力を得て成り立っています。その貢献に感謝するとともに、今後も、広く社会全体で「良い医師」を育てていただけるよう、皆様にお力添えいただければと願っています。



# 画期的な「研究支援員制度」で女性研究者を応援



東京女子医科大学女性医療人キャリア形成センターの女性医師・研究者支援部門は、これまでにないユニークな取り組みを行っている。女性研究者のもとに、研究をサポートする補助要員を配置することができる「研究支援員制度」がそれである。

「研究支援員制度」を利用している血液内科の田中紀奈医師(右)と支援員的小林美津子さん。

## ●研究を後押しするユニークな制度

東京女子医科大学総合研究棟3階の血液内科研究室。その一角で、白衣をまとった女性が一心に作業を行っている。血液疾患の患者さんの保存検体からDNAを抽出し、それをPCR(ポリメラーゼ連鎖反応)という手法を用いて大量に複製するという作業内容である。

作業に携わっているのは小林美津子さん。血液内科の田中紀奈医師の研究をサポートする“研究支援員”である。田中医師は、女性医療人キャリア形成センターの女性医師・研究者支援部門が

2018年度に創設した「研究支援員制度」の利用者であり、小林さんは田中医師の指示に従って作業を行っているのである。毎週月・水・木・金の4日間、午前11時から午後3時まで研究室に通っている小林さんは、ずっと作業に没頭する。その姿は生き生きとして、いかにも楽しげである。

「研究支援員制度」は、妊娠・子育て・介護などで時間の確保が難しい女性医学研究者と、高い学術レベルの研究を行っている将来有望な女性医学研究者を対象に、1日4時間・週4日を上限

として研究の補助作業を行う支援員を配置することができる(研究者1人につき支援員1人)という画期的なものである。支援員の人件費は女性医療人キャリア形成センターが負担する。女性研究者にとっては、研究の継続やキャリアアップが期待でき、利用価値のある制度といえよう。

小林さんは「研究支援員制度」がスタートした2018年度から支援員として採用され、今年3月まで後述する生理学講座(分子細胞生理学分野)の若林沙耶香講師の研究を支援してきた。そして4

## 若い世代の研究マインドをもっと高めていきたい

女性医師・研究者支援部門長 東京女子医科大学臨床検査科教授 佐藤 麻子

女性医療人キャリア形成センターの女性医師・研究者支援部門は、女性医師の診療継続と女性医学研究者の研究活動を支援するため、子育てなどのライフイベントと診療・教育・研究を両立しつつキャリア形成を継続できる環境を整備しています。具体的には、女性医師・研究者の勤務環境の整備(短時間勤務)や、院内保育・病児保育・ファミリーサポート事業など保育支援の充実を図ってきました。短時間勤務についてはすっかり定着し、今では病院としての制度になるなど大きな成果を上げています。

加えて、2018年度から新しい試みとして、女性医学研究者を対象に「研究支援員制度」をスタートさせました。妊娠や子育てなどのライフイベントによって研究活動の継続や研究時間の確保が難しくなった研究者や、高レ

ベルの研究を行っている将来有望な女性研究者を支援するため、研究支援員を配置して研究の補助作業を行ってもらうという制度です。支援員がいれば研究のスピードアップが期待できます。研究時間の確保が困難でも、支援員が補助作業を行うことにより、研究者が就業中でも研究は進んでいくわけです。

この制度の利用者募集に対し、初年度は10人、2年目の2019年度は8人の応募者がありました。これは予想を上回る数字でした。利用者は今のところ、基礎系・臨床系それぞれ1人ずつの枠しかありませんので、絞り込みには大いに悩みます。

これだけ制度の利用希望者がいるということは、困っている人が多いことを物語っています。ですから、利用者の枠をいかに増やしていけるかがこれからの課題となります。



最近では、研究することの楽しさを知らない若い世代が増えているような気がします。今後は、そういう人たちに研究マインドを高めてもらえるような環境づくりをしていくことも重要だと考えています。

月から、田中医師の研究支援員を務めることになったのである。

### ● 研究する時間が取れないジレンマ

田中医師は、「本邦の血液疾患におけるKIR genotypeの意義の検討」というテーマで2018年度からの科研費(科学研究費助成事業)を得て研究に取り組んでいる。KIRとは、キラー細胞免疫グロブリン様受容体のことで、がんをはじめとするさまざまな疾患の免疫の調節に関わっている。このKIRは人種によって差があり、日本人のKIR genotype(遺伝子型)と血液疾患の発症や経過におよぼす影響は、まだあまり解明されていないという。

「基礎研究と臨床の近さが血液内科の魅力の一つ」という田中医師だが、研究に費やす時間がなかなか取れないというジレンマを抱えていた。「血液内科の特性上、重症患者さんが多く連日のように緊急入院もあり、昼間はその治療や患者さんへの説明などで忙しく、業務の合間をぬって研究を行うことはとても困難です。そのうえ、2人の子どもがまだ小さい(8歳と5歳)ため、夜間や休日に研究を進めるというわけにもいきません。ですから、研究は少しずつしか進められませんでした」。

そんな中、田中医師は「研究支援員制度利用者募集」のポスターを目にし、「これだ!」と思ってすぐさま応募。選考

委員の審査を経て、今年4月から来年3月まで制度を利用することが可能となった。支援員は制度利用者が探すのを原則としているが、今年3月まで支援員を務めていた小林さんを佐藤麻子部門長(上段の囲み記事参照)から紹介され、研究の良きパートナーを得たわけである。

### ● 感動を覚えたすばらしいシステム

もともと研究や実験が好きで、研究所勤務が長かったという小林さんは、「働く女性を応援したいと考えていましたので、研究支援員制度を知ったときは感動しました。なんてすばらしいシステムなのだろうと。引き続き支援員として働くこ

とができ、感謝しています。田中先生は爽やかでかわいらしく、孫がいる私にとっては娘のような存在です。子育てをしながら頑張っていたらいいので、1年という短い期間ですが精一杯支援していきたいと思っています」という。

田中医師も、「小林さんはとても誠実な方で、安心して仕事を任せられます。1日4時間・週4日間お手伝いいただいているおかげで多くのデータを入手することができ、着実に結果を出せるようになってきています」と、笑みを浮かべながら支援員制度のメリットとその効果を強調する。

そして、「今の研究をまとめ上げること



田中医師の指示によって支援員小林さんが研究の補助作業を行う。



女性医師・研究者支援シンポジウムで研究発表する「研究支援員制度」の初年度利用者。  
左：循環器内科の佐藤加代子講師（現・准教授）、右：生理学講座（分子細胞生理学分野）の若林沙耶香講師。

によって、次のステップが見えてくると思います。臨床現場で患者さんに信頼される診療をしつつ、未来の患者さんに有益な知見が得られるような研究を続けていきたいですね」と抱負を語った。

### ●シンポジウムで研究の成果を発表

去る6月1日、「女性医師・研究者支援シンポジウム2019」が開催された。シンポジウムは女性医師・研究者支援部門が主催し、2011年からスタート。今年度は「研究支援員制度」初年度の利用者2人の研究発表がプログラムに組み入れられた。

最初に発表したのは循環器内科の佐藤加代子講師（現・准教授）で、テーマは「動脈硬化進展と心腎連関におけるCD4 T細胞の役割」。冒頭に「臨床、病院業務、教育などで研究が停滞していましたが、研究支援員制度が研究進展の糸口になりました。また、シンポジウムで発表する機会までいただき、ありがとうございます」と述べ、研究成果の報告に入った。

次に発表したのが生理学講座（分子細胞生理学分野）の若林沙耶香講師で、テーマは「逃避行動様式の決定

に関する分子遺伝学的研究」。前述の小林美津子さんが支援員を務め、「実験や資料の整理などをしていただいて明らかに研究が加速したのを実感しました」と語った。熊本出身の若林講師はさらに、「私の出産が熊本地震と重なり、実家が倒壊したり子育てで悩んだりしていたときに支援員制度を適用していただき、とても感謝しています」とも述べた。

来年のシンポジウムでは、前出の田中紀奈医師が支援員制度利用者の1人として研究発表を行うことになる。

## 女性医療人のための充実した子育て支援

女性医療人キャリア形成センターの女性医師・研究者支援部門は、これまで子育て支援にも積極的に取り組んできた。院内保育や病児保育はもとより、保育園・幼稚園・学校・塾などへの子どもの送迎やその前後の一時預かりなどに対応する会員制のファミリーサポート事業を展開するなど、充実した子育て支援策を整備。それらを女性医師・研究者だけでなく、女子医大の全職員が利用できるシステムとなっている。

女子医大病院の東病棟で看護師として働いている大浦佳世さんは、院内保育所を利用している一人である。長女を出産して1年後の昨年11月、職場復帰するために申し込んでいた認可保育園に空きが出なかったため、大浦さんは院内保育所に長女を預けることにしたのである。

「年度替わりの今年4月からは認可保育園に入園できるかも、と期待していましたが、やはりダメでした。院内保育所は待機児童を預かっていただけますので、たいへんありがたいですね。自宅から歩いて行ける距離で、病棟のすぐ近くに位置していますから、子どもが熱を出して呼び出しがあったときなども、

すぐにかかけつけることができます。病児保育所も隣接していて安心感があります」と大浦さんはいう。

また、「最初の頃は、朝、娘を預けると別れ際によく泣かれましたが、今ではすっかり慣れて楽しそうに通っています。園児が比較的少なく、手厚く密度の濃い保育をしていただいていると感じています」と、院内保育所のメリットを指摘する。

大浦さんは今、午前8時から午後3時までの短時間勤務をしているが、夫の協力を得て月2回は午後5時30分まで勤務し、夜勤も同じく月2回ほどこなしている。

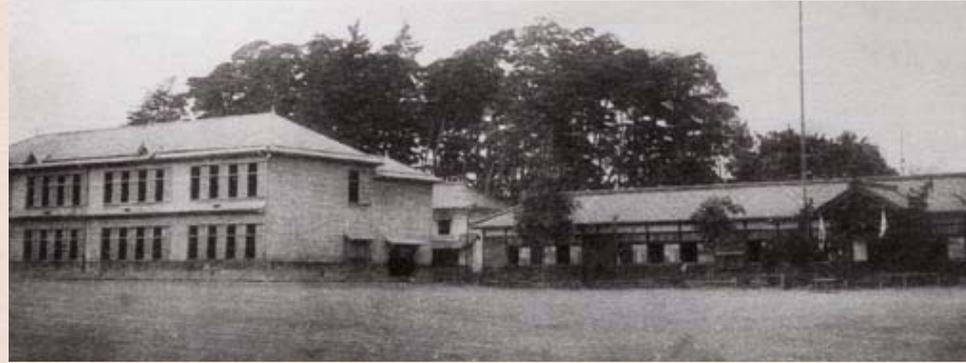
大浦さんはファミリーサポートにも会員登録しており、子どもの一時預かりなどの支援も受けているという。「歯科医院や整骨院へ行くときなどに、家で子どもの相手をしていただいたり、医院の待合室で子どもと一緒に待っていただいたりしています。私も主人も九州出身で東京には親戚がなく、そうしたことを頼める人がいません。ですから、ファミリーサポートは大助かりです。女子医大ならではの子育て支援を象徴するシステムだといえるでしょう」と語ってくれた。



院内保育所で遊ぶ大浦佳世さんの長女（上）と帰りの挨拶をする大浦さん親子。

——その12 校舎復興——

# 戦災で灰燼に帰した学校を再建



予科の新入生と本科1年生が疎開し授業が行われた山梨県中巨摩郡豊村(現南アルプス市)の小学校。

昭和12(1937)年に勃発した日中戦争は、4年後の昭和16(1941)年に太平洋戦争へと拡大。戦局が激しさを増す中、翌年4月18日にアメリカの爆撃機による初の日本本土空襲が行われ、東京や川崎、名古屋、神戸などが爆撃された。そして昭和20(1945)年4月13日の夜、ついに東京女子医学専門学校(以下、東京女子医専)も空襲にさらされた。

そのとき彌生は附属病院の一室に寝泊まりしていた。B29が投下した爆弾によって周辺に火の手が上がり、それが病院に迫ってくる。彌生は自動車に乗って避難する途中、首相になったばかりの鈴木貫太郎夫妻を同乗させ、永田町の官邸まで送ったというエピソードを残している。

不安な一夜を明かして学校へ戻った彌生は呆然とする。病院本館と学生の寄宿舎、細菌学教室を残し、学校の施設が全焼してしまったのである。のちに教え子に宛てた手紙には、そのときの様子が次のように綴られている。

「四月十三日は学校全部、増築病棟、至誠会第三病院、邸宅等一夜にして烏有に帰しました。しかし、二百の入院患者と数百の生徒に一人として負傷者を出しませんでしたことが、不幸中の幸いであったと諦むるほかはありません。とは申しますものの増築病棟、基礎教室、至誠会第三病院とも三年



ほど前物資不足にして資材入手難のとき、無理に無理をして、おのおの七百坪を建築したことで相当費用も嵩張りたるに、わずか二年を出でずして焼失しましたことはいかにも残念でありました」

校舎を焼失した東京女子医専は、近くの成城中学や隣接する陸軍兵器行政本部(元陸軍

経理学校)の一角を借りて授業を続けた。だが、その後も東京は空襲に見舞われた。軽井沢の千ヶ滝別荘に身を寄せた彌生は、学生たちを疎開させるべくその候補地を物色。山梨県中巨摩郡豊村(現南アルプス市)の小学校を借り受けることができ、予科の新入生と本科1年生が疎開することとなった。

広島と長崎に原爆が投下され、敗戦を迎えた8月15日。彌生は千ヶ滝の別荘でラジオの前に直立し、玉音放送に嗚咽をもらした。だが、「かく極まりました上は、学校も復興の構想を練ることができます」と、敗戦をポジティブに捉え、学校の再建に取り組む決意を新たにしました。

熟慮に熟慮を重ね、導き出した再建計画の骨子は、焼け残った寄宿舎を売り払い、そのお金で校舎を整備するというものだった。寄宿舎は、58万円もの資金を投じた鉄筋コンクリート造りの立派なものだっただけに、売却するのは惜しまれたが、背に腹はかえられない。これを売り払った資金を元に、学校の焼け跡に建てられた50軒ほどのバラックを買い取って寄宿舎に充てるとともに、陸軍兵器行政本部の建物2棟と7,000坪の敷地を借り受け、その建物を基礎教室に改造。さらに1棟を建て増し、ようやく学校としての施設を整備することができたのである。

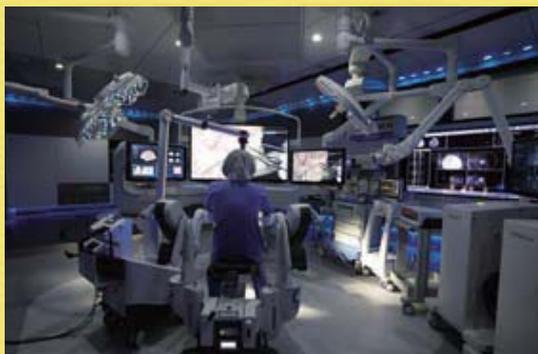
## 編集後記

■「耳掃除に綿棒はタブーというのがアメリカの常識です」と東医療センターの須納瀬教授。折しもイギリスで綿棒による耳かきが原因で意識不明になった人がいるとの報道が。綿棒を耳に入れてはいけないとは驚きました。  
■桜島からフェリーで鹿児島港へ戻る

と、1,000mを優に超える噴煙が立ち上っているのにビックリ。しばらくして市街の照國神社の境内を歩き出すと、ボツリボツリと火山灰が降りかかってきて瞬間に紺色のジャケットが灰色に染まり、息をするのも困難に。地元の人によると、「こんなに降ったのは3か月ぶり

とのことでした。  
■「鹿児島市には子どもがわんさかいて少子化問題はどこ吹く風。しかも、いくら騒いでも大人たちはそれを許しています」と植村病院の新井尚希理事長。そうしたおおらかさが鹿児島人の気質なのでしょう。新井理事長も明るくおお

かな「薩摩おごじょ」でした。  
■住民との交流がプログラムに組まれていた大月市立中央病院での地域医療実習。当日は季節外れの雪に見舞われ中止となってしまいましたが、住民の皆さんのご厚意により仕切り直して後日開催。ありがとうございました。



本格稼働したスマート治療室「Hyper SCOT」。



*Sincere*  
シンシア  
No.12

発行 学校法人 東京女子医科大学  
〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 TEL.03-3353-8111 (代)  
<http://www.twmu.ac.jp/>  
発行日 2019年7月  
制作 株式会社 教育広報社

■「Sincere」に関するお問い合わせやご意見・ご要望は、下記までお気軽にどうぞ。  
〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 東京女子医科大学 広報室 Mail address: kouhou.bm@twmu.ac.jp  
※「Sincere」のバックナンバーはすべて大学ホームページからご覧いただけます。